

### 13. 田原坂資料館下調査地

#### a. 調査地の位置と環境（第3図・第181図）

本調査地の周辺はみかん畑で階段状に造成され、旧状を残すのは本地のみである。付近では唯一の開墾されていない昔のままの土地とのことであった。台地上の田原坂公園と台地下の舟底集落の中間の斜面中央にあり、西正面の二俣台地に向かって右方と左方は突き出た舌状台地で、標高は82m～74m。特に左方の中久保集落北西の「長窪山」は、激戦地として各種記録類にも記述されている。

概報Ⅰの「調査地A」と同じ場所である。

#### b. 現地調査の成果

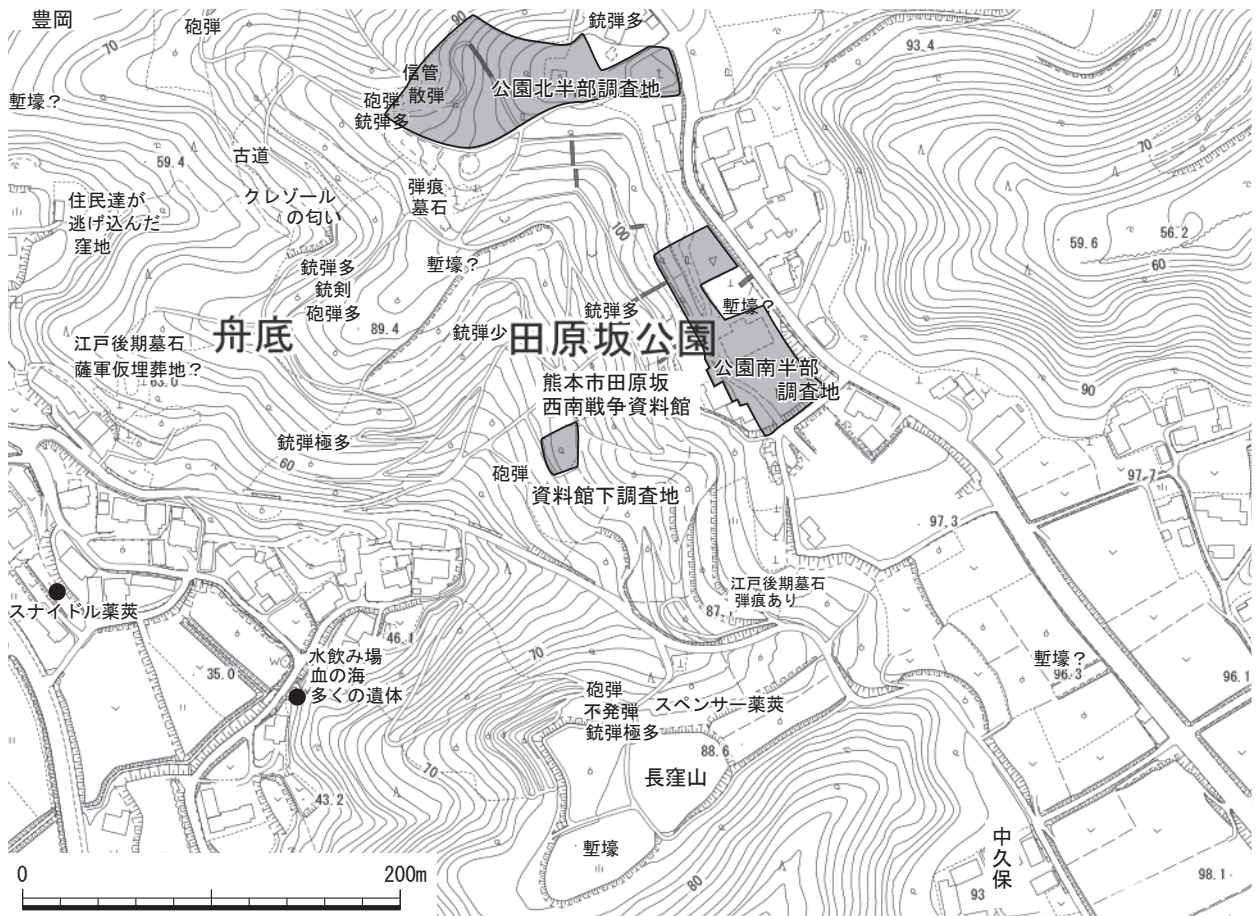
##### (1) 遺物の分布状況（第182図）

調査は地形からみて塹壕などの所在の可能性は低いと考えて、地形測量と金属探知機調査とした。金属探知機遺物はスナイドル小銃弾2点で斜面下方で確認、表面採集遺物はスナイドル小銃弾1点と四斤砲弾片1点で、畑内通路採集。探知機調査では反応点は400カ所以上だったが、ほとんどが空缶などであった。遺物は多くはないが、台地上の田原坂公園南半部調査地や周辺でも四斤砲弾片は出土しており、政府軍の二俣瓜生田砲台からの一連の砲撃によるものと考えられる。

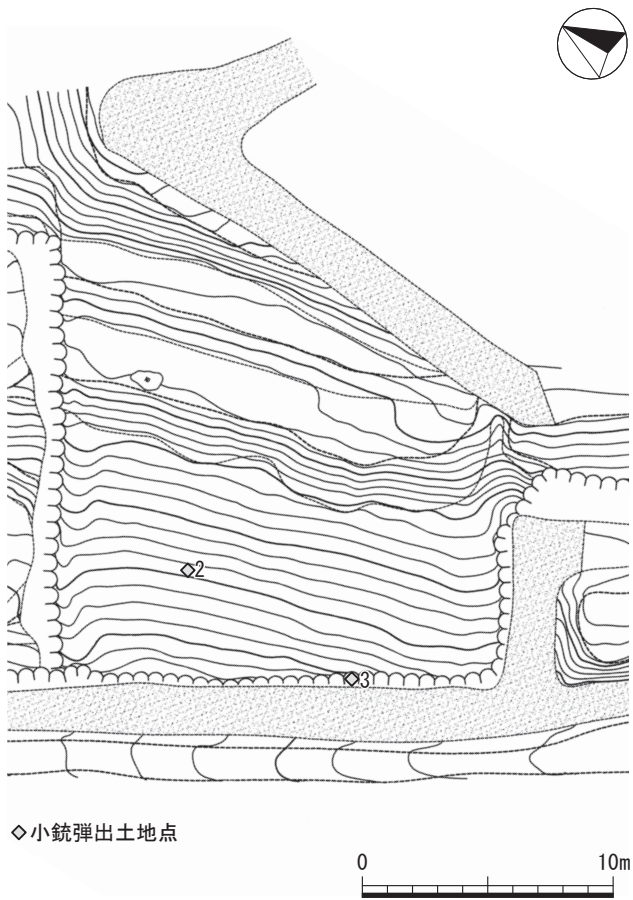
#### c. 遺物

##### (1) 西南戦争関連遺物（第183図）

小銃弾・四斤砲弾 1は裾部がつぶれ、2は頭部と裾部が大きく変形し、3は側部全体が潰れる。4は四斤砲弾の底部近くの破片である。



第181図 資料館下調査地と周辺調査地、位置図（1/4,000）



第 182 図 資料館下調査地 遺物分布図 (1 / 300)



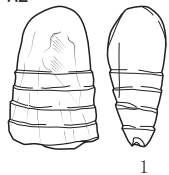
金属探知機調査状況



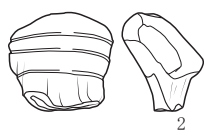
竹棒が反応点

スナイドル銃弾

A2

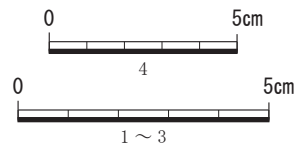
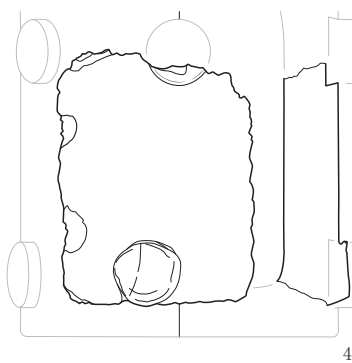


B



※小銃弾は分類毎に並べた。  
(小銃弾分類表を参照)

四斤砲弾



第 183 図 金属探知機採集遺物 小銃弾・四斤砲弾

第 18 表 田原坂資料館下調査地 出土遺物観察表

スナイドル銃弾 (第 183 図)

挿図 No.	実測 No.	取上 No.	分類	圈溝			栓 材/色	腔綫 条	計測値(mm/g)			備考
				数	形	刻目			全長	最大径	重さ	
1	さ19	表採	A2	4	鋸	×	—	不明	28.2	13.7	28.4	
2	さ18	Y2	A2	4	鋸	×	—	不明	19.1	20.6	23.7	
3	さ17	Y1	B	4	鋸	○	—	5	25.0	16.1	29.0	

砲弾 (第 183 図)

挿図 No.	実測 No.	取上 No.	品名	計測値(mm/g)			備考
				縦	横	重さ	
4	さ35	表採	胴部	66.1	50.0	231.5	

資料館下

## 14. 岡林遺跡調査地

### a. 調査地の位置と環境 (第3図・第185図)

本調査地は国指定史跡西南戦争遺跡の田原坂本道一ノ坂の南西にあり、広義の戦場の範囲内には入る。しかし、平成21年度の踏査や聞き取り調査では小銃弾の分布は少量で、以前からあまり見かけないが、西の崖面には小銃弾があったとのことであった。当地付近での戦闘の詳細は不明な部分が多く、今後の調査が待たれる。

当地の地形は東から西へ、北から南へも緩やかに下降し、東角が最高所で標高82mほど、南端が最低所で標高64m、高低差は18mほどである。西では数段があつて、その先は低地にいたる。土地所有者によると、当地は過去に数回にわたり大型重機で造成したとのことで、遺構と遺物は造成などで多くは失われた可能性がある。

### b. 現地調査の成果 (第184図～第186図)

調査地の平坦部に掘り下げた試掘坑(1T～19T、24T～26T、29T)では、地表下約30cmで旧植木町基本土層IX層類似の淡黄褐色粘土層以下が認められ、大きく削平されていることが判明した。

みかん改植溝は幅1～1.2m、深さ0.4～0.8mで、平行して全域にわたり掘削されていた。南西段部分の試掘坑(20T～23T、27T～28T)でも、平坦部と同様なみかん改植溝があり、客土で現状の段が造成されていた。

また、多くの試掘坑では、幅1.6mの爪付重機の掘削痕跡が確認され、当地全体が大きく削平、造成、攪乱を受けている状況が明らかになった。

#### (1) 遺物の分布状況

トレンチでは遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。金属探知機調査で平坦部の地表面から小銃弾4点を採集したが、他の遺物は少なく表土も攪乱されており帰属は不明。

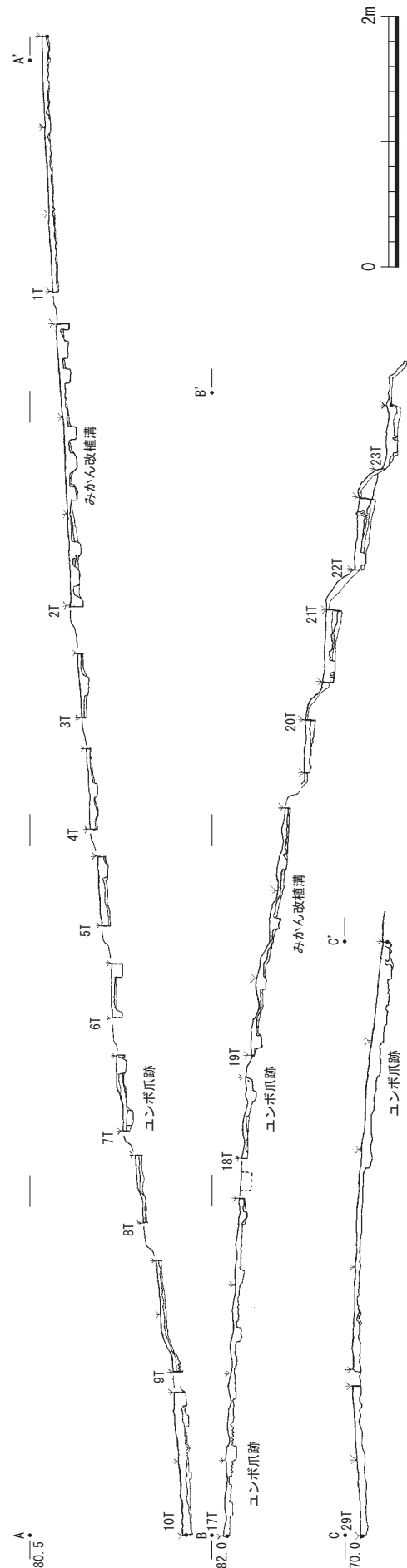
### c. 遺物

#### (1) 西南戦争関連遺物 (第187図)

**小銃弾** スナイドル銃弾A2、Bタイプとシャープス銃弾である。4点という少ない中でも、複数種類があるのは示唆に富む。1に変形はほとんどなく、2は頭部と側部が潰れ条線痕が明瞭である。3はやや細長く頭部が少し凹む。

#### (2) その他の遺物 (第187図5)

**鉄製品** 5は、正面が宝珠形(立体)、裏面が平坦の鋳造鉄製品である。調度金具であろうか。



第184図 岡林遺跡調査地トレンチ断面図

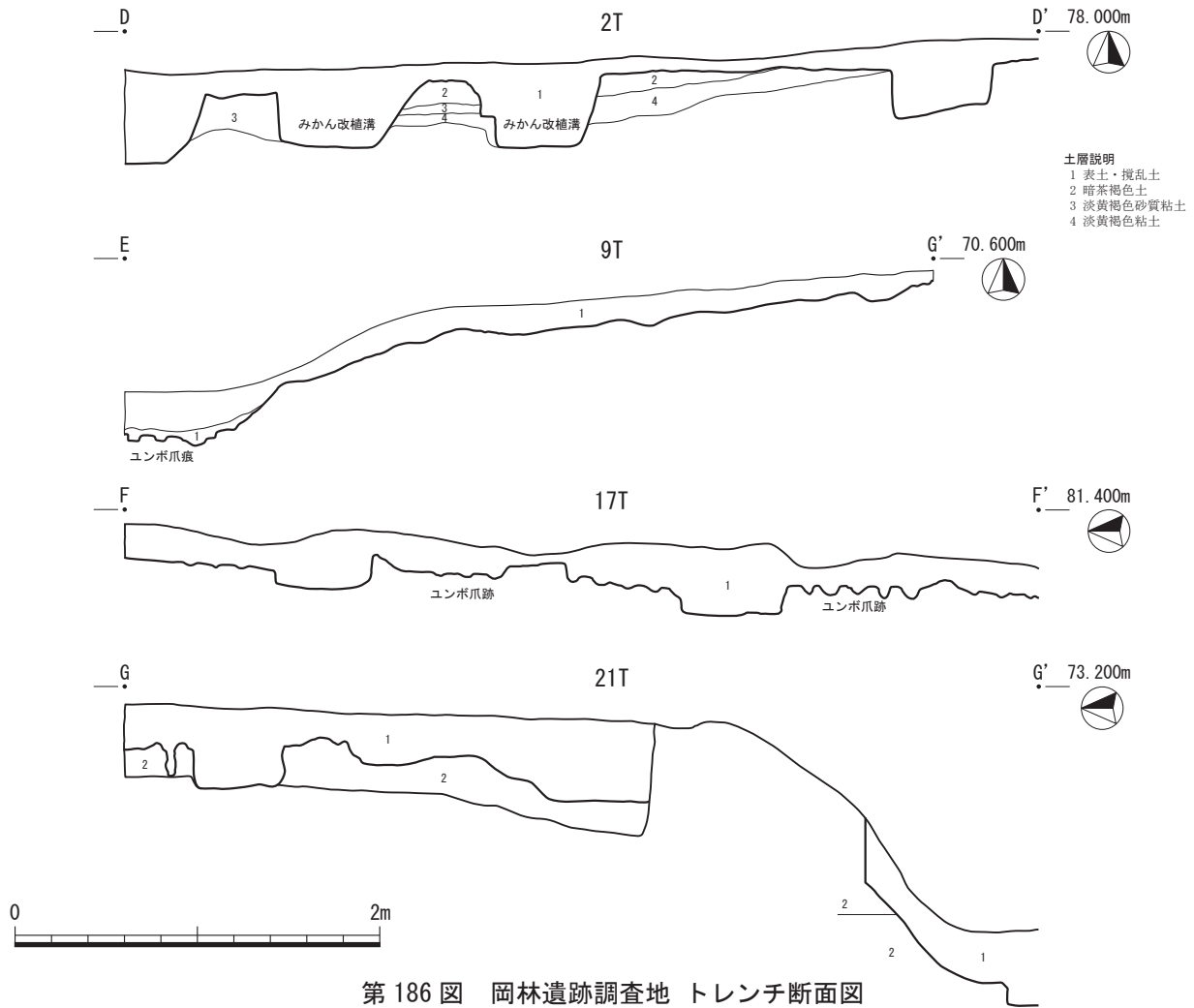


トレンチ一覧表

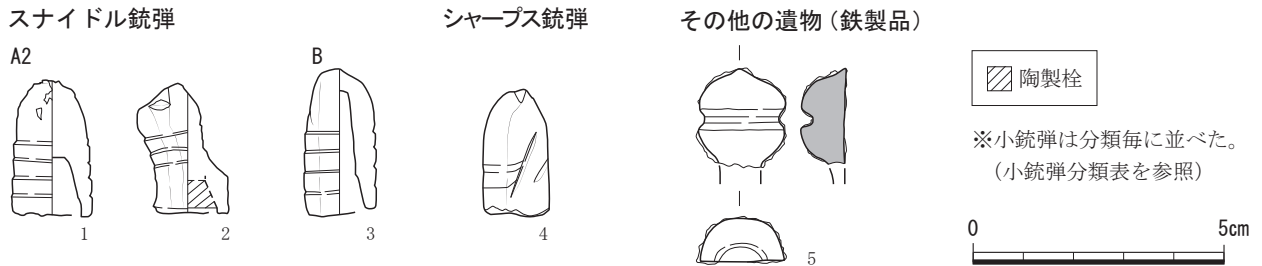
番号	面積	番号	面積	番号	面積
1T	20.30	11T	7.00	21T	5.80
2T	22.50	12T	5.10	22T	5.70
3T	5.10	13T	5.70	23T	5.20
4T	6.50	14T	5.30	24T	14.30
5T	5.55	15T	7.00	25T	5.75
6T	4.35	16T	10.10	26T	14.10
7T	60.05	17T	27.00	27T	5.66
8T	5.40	18T	6.30	28T	4.36
9T	8.85	19T	19.8	29T	47.50
10T	11.40	20T	4.30		

単位：㎡

第185図 岡林遺跡全測図及びトレンチ位置図(1/800)



第186図 岡林遺跡調査地 トレンチ断面図



第187図 金属探知機採集遺物 小銃弾・その他の遺物－鉄製品

第19表 岡林遺跡調査地 出土遺物観察表

スナイドル銃弾 (第187図)

挿図 No.	実測 No.	取上 No.	分類	圏溝			栓 材/色	腔綫 条	計測値(mm/g)			備考
				数	形	刻目			全長	最大径	重さ	
1	す1	Y1	A2	4	鋸	×	—	5	26.5	15.5	27.9	
2	す2	Y2	A2	4	鋸	×	陶/灰	5	25.0	17.0	29.6	
3	す3	Y3	B	4	鋸	×	—	5	29.0	14.5	29.2	刻印有⊕

その他の銃弾 (第187図)

挿図 No.	実測 No.	種類	取上 No.	圏溝		腔綫 条	計測値(mm/g)			備考
				数	形		全長	最大径	重さ	
4	す4	シャープス銃弾	Y4	2	—	—	25.0	13.0	26.9	

その他の遺物－鉄製品 (第187図)

挿図 No.	実測 No.	取上 No.	品名	長さ※mm (残存長)	重さ ※g	備考
5	す1707	—	調度金具?	(20)	8.1	



岡林遺跡全景(東より)



2T 断面



2T 全景(西より)



20T ユンボ爪跡

田原坂調査地 採集・出土遺物 台帳点数・図版掲載点数表

調査地名	未使用弾	薬莖	雷管	小銃弾	小銃弾の栓	摩擦管	四斤砲弾	鉄製品	銭貨	土器・陶磁器	石	その他	合計
北平古道	0	11	0	212	0	0	2	35	13	125	1	116	515
	0	11	0	212	0	0	2	24	7	3	1	15	275
田原城跡・寺跡	5	107	0	227	0	0	4	3	3	17	0	18	384
	5	107	0	227	0	0	4	2	3	74	4	8	434
熊野座神社	9	94	0	706	4	0	60	41	54	0	0	31	999
	9	94	0	706	4	0	79	31	52	4	0	13	992
みかん小屋周辺	0	6	0	137	0	0	10	2	0	0	0	1	156
	0	6	0	137	0	0	10	2	0	0	0	0	155
本道二ノ坂	10	407	1	1501	4	5	13	98	13	1	0	15	2068
	10	406	1	1501	4	5	13	38	13	1	0	2	1994
谷村計介碑	0	2	0	132	0	0	1	3	1	4	0	0	143
	0	2	0	132	0	0	1	3	2	1	0	0	141
市有地(北)	0	6	0	165	0	0	14	0	2	0	0	1	188
	0	6	0	165	0	0	14	0	2	0	0	1	188
市有地(南)	0	0	0	10	0	0	4	1	0	0	0	0	15
	0	0	0	10	0	0	4	1	0	0	0	0	15
公園北半部	3	26	24	262	0	0	42	36	7	13	27	28	468
	3	21	17	262	0	0	43	18	5	17	0	9	395
公園南半部	0	0	0	7	0	0	1	0	0	14	0	1	23
	0	0	0	7	0	0	1	0	0	15	0	2	25
資料館下	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	4
	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	4
岡林遺跡	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	0	0	0	4	0	0	0	1	0	21	0	0	5
舟底遺跡確認調査	0	13	2	80	0	2	36	27	10	41	0	41	252
	0	12	2	77	0	2	33	28	13	21	0	37	225
合計	27	672	27	3446	8	7	188	246	103	215	28	252	5219
	27	665	20	3443	8	7	205	148	97	136	5	87	4848

※ 上段・台帳数、下段・図掲載数

## 15. 豊岡の眼鏡橋

本橋は熊本市北区植木町鈴麦字洲崎地内の旧三池往還の延長上、田原坂登り口近くに位置する。木葉川支流の中谷川（田原川・滑川とも）に架かる石造の単一アーチ橋で、享和2年（1802）10月の銘が刻まれており、架橋年代が確認でき現存するものとしては熊本県内最古の事例である。比較的大形で、江戸時代後期以降、地域の中核的な石橋として利用されていた。

現況は後世の改変が著しい。特に壁石は竣工当時の残存が少なく、新石による補修部分が多い。橋上部（路面）は昭和35年3月にコンクリート工事によって改変され、橋の中央部が約55cmかさ上げされている。ちなみに、平成17年3月までは車両が通行していた。

平成5年12月に植木町文化財、平成23年4月に熊本市文化財（建造物）に指定されている。

### a. 西南戦争遺跡の構成要素としての価値（第188図）

橋の幅12尺（2間、3.63m）は、旧三池往還の道幅を反映したものと考えられ、これは延長にある田原坂が、その道幅から政府軍にとって大量の人馬・武器などを通すことができる唯一の坂道であったといわれることの証左となっている。本橋から約270m西側の玉東町上木葉（境木）の旧三池往還沿いには「田原坂攻撃官軍第一線陣地」の標柱形の石碑が立つ。西南戦争の際には、政薩両軍ともこの石橋を通行し、政府軍は田原坂本道の右翼と左翼に回り込むため、この川沿いの旧道を通り、本橋を拠点に出撃したと伝わる。もし、薩摩軍が本橋を破却していれば（堅牢な構造のため破却は難しかったのであろう）、政府軍の兵員や物資、大砲などの運搬に大きな支障があり、戦況に影響が出たことであろう。

以上、本橋は西南戦争時の勝敗の帰趨に多大な影響を与えたものとして評価される。

### b. 構造（第190図～第198図）

阿蘇溶結凝灰岩製、単一アーチ形の反り橋で、これは戦後に上野彦馬が田原坂を北側の丘陵から撮影した古写真（巻頭PL.1、以下「古写真」）や田原坂の戦いを描いた大牟田市湯谷天満宮の奉納絵馬によっても確認できる。後者は、明治10年11月の紀年銘もさることながら、簡易な描き方ではあるものの、実際に現場を見た者あるいはその話を聞いた者でなければ分からない忠実な描写が認められ、本橋の表現についても概ね信頼できるものと考えられる。

規模は径間（アーチ両脚間の水平長）38尺3寸－11.60m、拱矢（アーチの頂部と基礎石上面の垂直高）14尺6寸－4.43m、幅12尺（2間）－3.63m、橋上部の長さは現状で12.5mである（後世の改変後の数値）。以上、計測は市販の尺目盛付スケールを使用し、1尺≒30.3cm、1寸≒3.03cmで換算している。

#### （1）基礎石・輪石

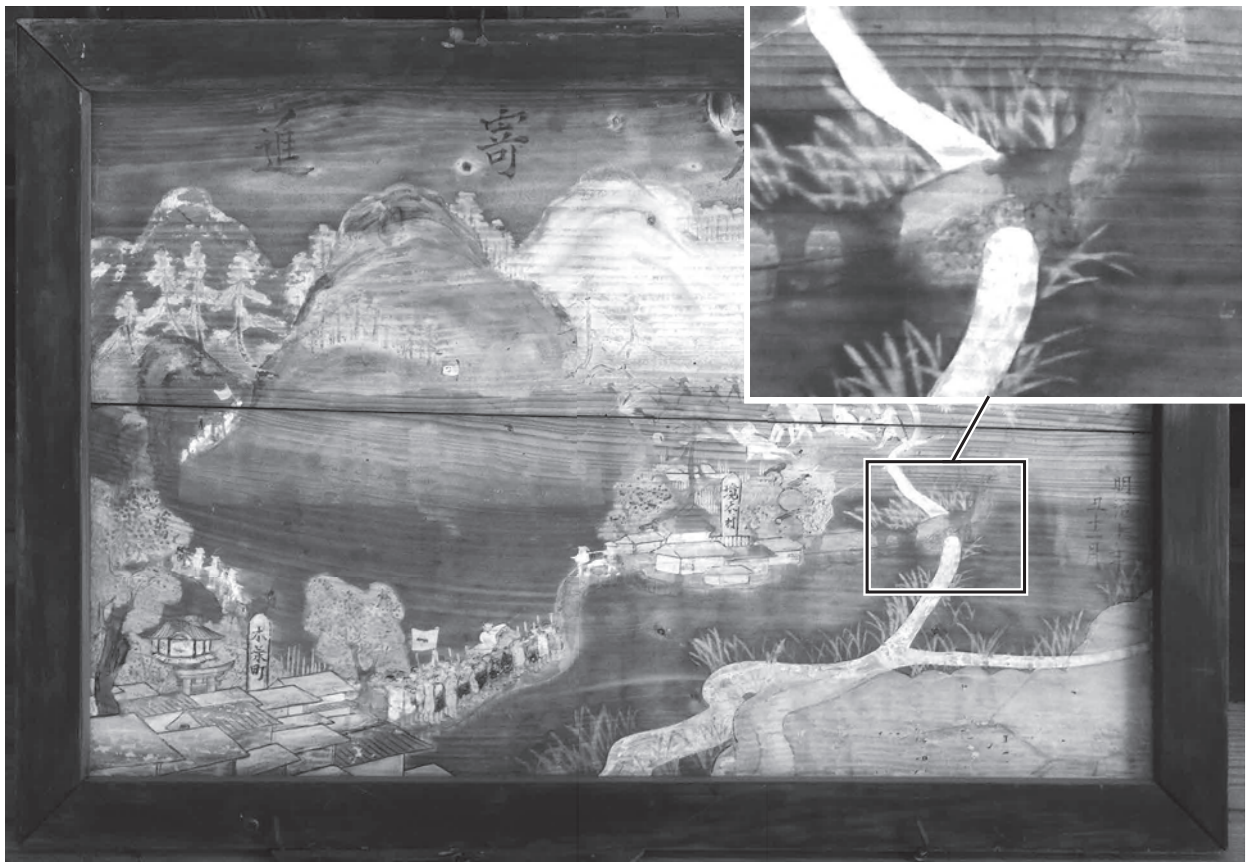
遠目には、損傷は上流左岸輪石下部が目立つ程度であるが、全体的に石材のヒビ割れが無数にあり、折損も多い。輪石は左岸側でアーチが下方にたわんでおり、本来の優美な円弧を描いていない。

基礎石は左岸4石、右岸3石で構成される。右岸においては、基礎石を安定させるためであろう、基礎石に接する上流側に平面長方形の切石が敷き並べてある。

輪石は横積みだが、要石のみは長手積み（リブアーチ形式）で、2つの構法が併用されており、このことは本橋の著しい特徴といえる。輪石は要石を含めて160石で構成され、左岸24列73石、中央（要石）1列13石、右岸24列74石である。1列は2石～4石で構成され、3石積みが最も多い。2石積みは下半に採用され、4石積みは左右岸とも上半に多い傾向がある。輪石下面（橋の下から見上げた面）は揃えられ、幅は左岸24列中22列が1尺－30cmで、他、下から21列目が9寸－27cm、23列目が1尺1寸－33.5cm、右岸は24列中21列が1尺－30cm、他、下から15列目と21列目が9寸－27cm、23列目が1尺1寸－33.5cmである。輪石側面（橋を横から見た面）については、要石を除く輪石の上幅は、下幅1尺なら概ね1尺1寸で台形を呈し、厚みはばらつきがあって1尺5寸－45cm～1尺7寸－52cmである。



第188図 豊岡の眼鏡橋位置図 (1 / 5,000)



第189図 湯谷天満宮絵馬に描かれた豊岡の眼鏡橋 (明治10年11月銘)

## (2) 要石

要石について特記する。12石が長手積みで、右岸側中央の1石のみが横積みである。上流側4石は同規模だが、下流側4石と中央5石の幅にはばらつきがみられる。

記銘が刻まれる要石側面は、上部がコンクリート被覆のため詳細は不明ながら、現状で上流側は上幅3尺3寸5分-101.5cm、下幅3尺-91cm、厚さ2尺5分-62cm、奥行1尺1寸1分-33.5cm、下流側は上幅3尺5寸6分-108cm、下幅3尺5分-92.5cm、厚さ2尺・60.5cm、奥行1尺1分-30.6cmである。下面の反り高はともに5分-1.5cmである。上流側に架橋に携わった庄屋などの名前が、下流側に石工名、紀年銘などが刻される。記銘によれば、架橋には内田手永月田村（現玉名市月田）と正院手永円台寺村（現植木町円台寺）の石工が請け負ったことが判る。この2箇村はともに凝灰岩の良好な産出地で、これらは特に「江田石」・「円台寺石」と呼ばれている。また、支保工は南関手永関東村（現（玉名郡南関町関東）の大工が担ったとみられる。

ちなみに、記銘と同年の享和2年（1802）に発給された永青文庫町在資料「御郡代直觸 伊形慶吉 才覚 銭寸志差出の褒美にて一領一疋召出し」によれば、架橋費用は4貫2百目で、うち2貫7百目を差し出した伊形慶吉はその恩賞として一領一疋（郷土）に任じられている。

右同	右同	右同	正院	田原	鈴	石橋造立請込
良助	甚兵衛	孝三郎	會所詰	彦次郎	原村	
			彌兵衛		村	
					村	

上流側要石記銘

享和 二 壬 戌 十 月 吉 日	川カ滑郡本山						
	大工	南関	右同	正院	右同	右同	石工
	嘉右衛門	手永関東村	太平	手永圓基寺	惣八	次平	理左衛門
							門

下流側要石記銘

## (3) 太柄

### 熊本県内における太柄石による輪石側面の接続事例

側面の輪石間は太柄石により接続しており、これは前記した横積みと長手積みを併用する構法とともに本橋の特徴の一つである。上流左右岸に各24箇所ずつ

名称	所在地	架橋年	長さ/幅(m)	石工	備考
洞口橋	山鹿市菊鹿町	天明2年(1802)以前	6.0/0.58	仁平	現存せず、復元展示あり
豊岡橋	熊本市植木町	享和2年(1802)	12.5/3.63	理左衛門ほか4名	
八幡宮前橋	山鹿市石	天明~文化年間?	2.4/2.14	不明	
門前川橋	上益城郡御船町	文化5年(1808)	7.0/2.6	不明	
田中橋	山鹿市鹿北町	安政5年(1858)	17.2/4.0	藤左衛門・藤兵衛 ※山鹿郡相良在	太柄は要石の左右のみ
井口橋	菊池郡菊陽町	江戸時代末	10.8/3.0	不明	

※参考文献(熊本日日新聞社1998・松岡1787)と踏査成果をもとに作成

の計96箇所、側面の輪石と輪石の間に用いられている。ただし、現状で確認できる太柄石の数は上流左岸11点、上流右岸16点、下流左岸15点、下流右岸16点の計58点、確認できないのが上流左岸1点、上流右岸5点、下流左岸1点、下流右岸3点の計10点で、約6~7割が残存している。太柄の石材、形や色は様々で長扁平な小石材が多い。形状は長さ12cm、幅5cm程度で、略長方形・楕円形・三角形を呈し、表面の色は赤色・青色・緑色・白色など様々である。これらの石材は遠方ではなく、本橋周辺において普通に見られる河原石である。太柄穴は太柄が自然石ゆえ各々に応じた形状を呈しており、使用する石材を決めてから、輪石を彫り込んだことが判る。深さは概ね1寸5分-約4cmである。太柄には輪石の縦ズレ防止と装飾的意味合いの双方が考えられる。

県内において太柄石が用いられる事例は、管見では6例ある。主に文化年間以前の、県内では古い時期のものであり、初期の眼鏡橋架橋に関わった石工による創意工夫から生まれた工法であるという(稲用・北野・尾道1999)。

#### (4) 壁石

壁石は前述のように竣工当時とみられる旧状の残存は少なく、特に左岸では補修による新石部分が多い。旧状部分では、概ね厚さが揃った切石を水平積みし、輪石に接する部分は輪石の形状に合わせて加工している。また、切石間の隙間には加工した間詰石が認められる。

#### (5) その他

竣工当時の親柱と欄干は現存しない。部材を川中で探したが確認できなかった。古写真を見ると、親柱は道沿いに設けられた隅切部に立てられている（親柱間は橋本体の幅よりも広い）。欄干は昭和35年の改変前の写真にも見られ、これによれば柱状の切石を横に並べている（高野1989）。

橋の脇の川沿いには、架橋当時の石材を使用したとみられる護岸石垣が残存している。護岸石垣は川の流れて積まれ、壁石に接続させていたとみられるが、旧状を留める上流側左岸下位を見ると「く」字状に平面屈曲しており、上流からの水を受け流して橋本体への水圧を減ずる構造をとっている。この部分の長さは、川との平行部分が8尺5寸－2.58m、屈曲部分が6尺4寸5分－1.94mで計14尺9寸5分－4.52mである。石垣最下の根石と川床との隙間には河原石を詰めている。

下流左岸壁石に接して排水溝の開口部が認められる。排水溝は暗渠で、開口部の間口は縦2尺2寸－66.5cm、横1尺8寸－55cmで、左壁（向かって、以下同）石1石は基礎石上に、右壁石は3段を底石上に立ち上げており、天井石は2段で構成される。左壁石は小口部を切り込んで、天井石を受けている。

工具痕は、2cm前後の幅の平行条線状を呈しており、形状から推定すれば、現在の工具でいえば小形のツルハシ・ガンヅメ・ノミなどを使用したと考えられる。工具痕はほぼ全ての石材に認められるが、輪石側面は他と比較して表面が平坦である。このことは要石側面においてより明瞭であり、条線も極浅く残るのみである。記銘を刻むために平滑に仕上げたものと考えられる。工具痕について、今ひとつ注目されるのは、輪石の各石材下面の縁辺部において縁取り状に細かい削痕が認められることである。所謂江戸切りに近似した加工である。通常ならば見えない橋の内側において丁寧な加工が施されていることは、各石材の隙間を無くして強度を高める措置とみられ、県内においては極めて稀有な事例である。

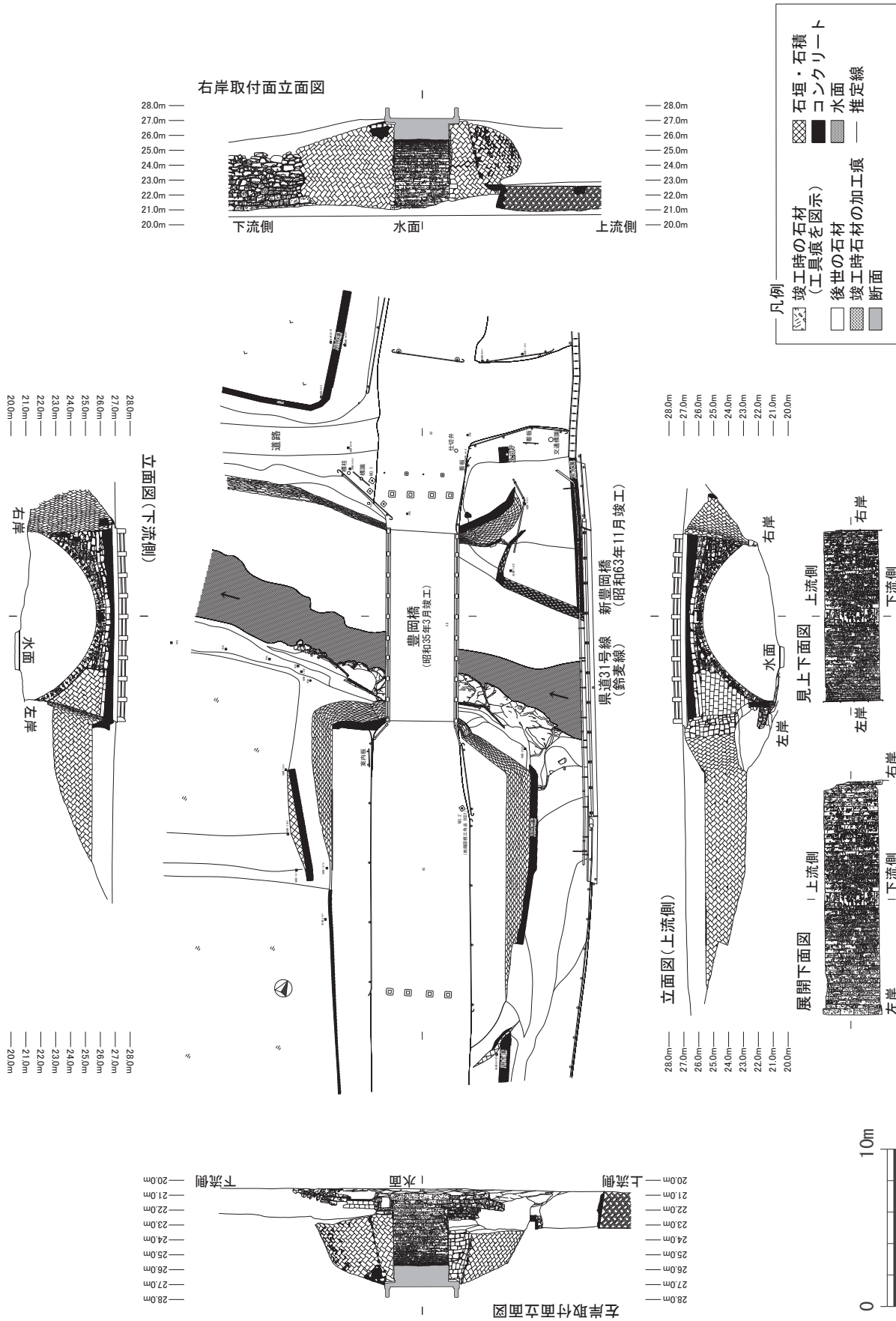
最後に、左岸下流側の田圃が一段低いことに注目する。橋本体や右岸の旧往還を保護する遊水池の機能があつたものと思われる。

#### 【参考文献】

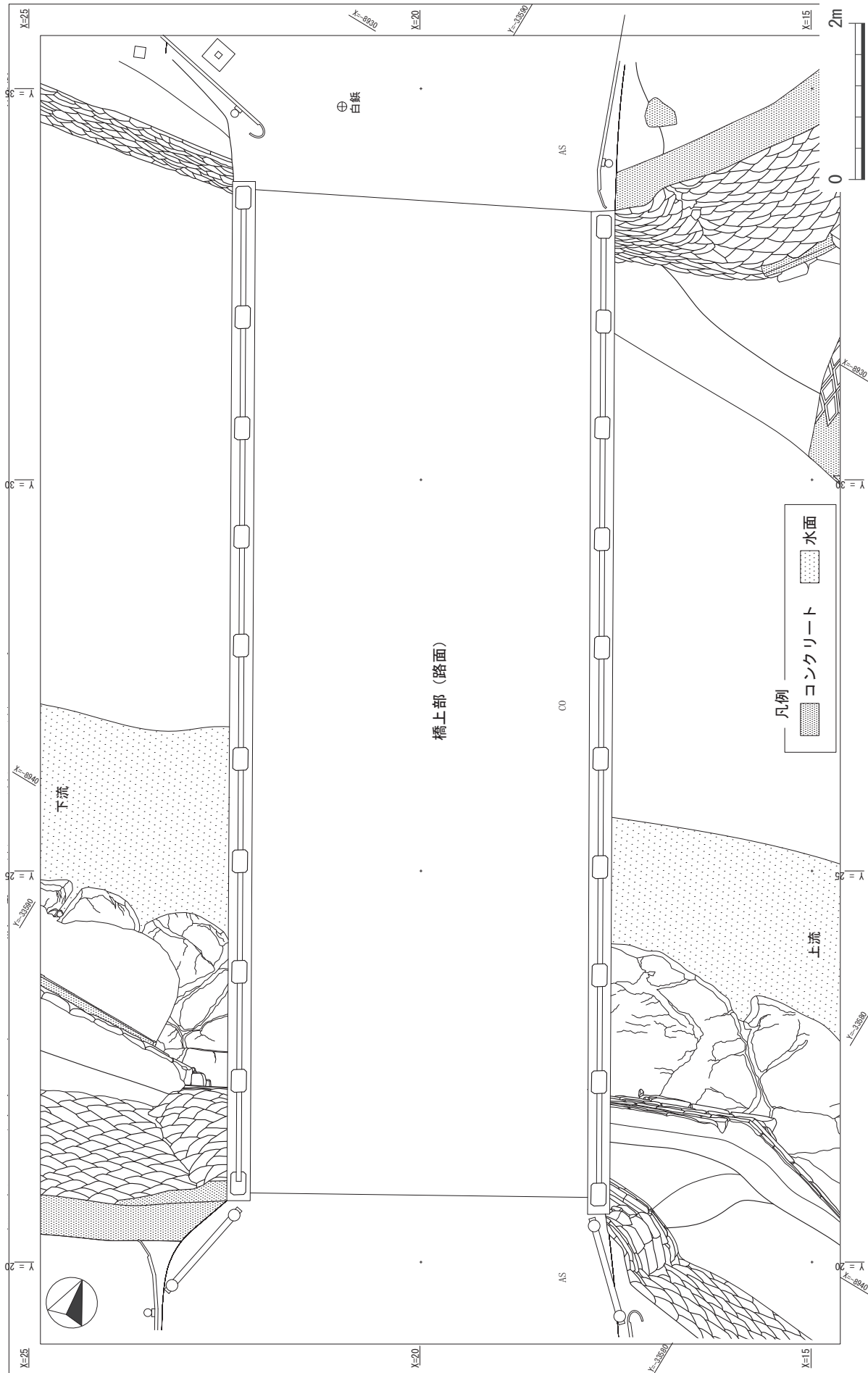
- 稲用光治・北野 隆・尾道建二 1999「九州の石造建造物の研究 9. 肥後の初期の目鑑橋について」『日本建築学会九州支部研究報告第38号』日本建築学会  
熊本日日新聞社 1998『熊本の石橋313』  
高野和人編 1989『西南戦争 戦袍日記写真集』青潮社  
松岡政雄 178『文化財 肥後の眼鏡橋』日本談義社



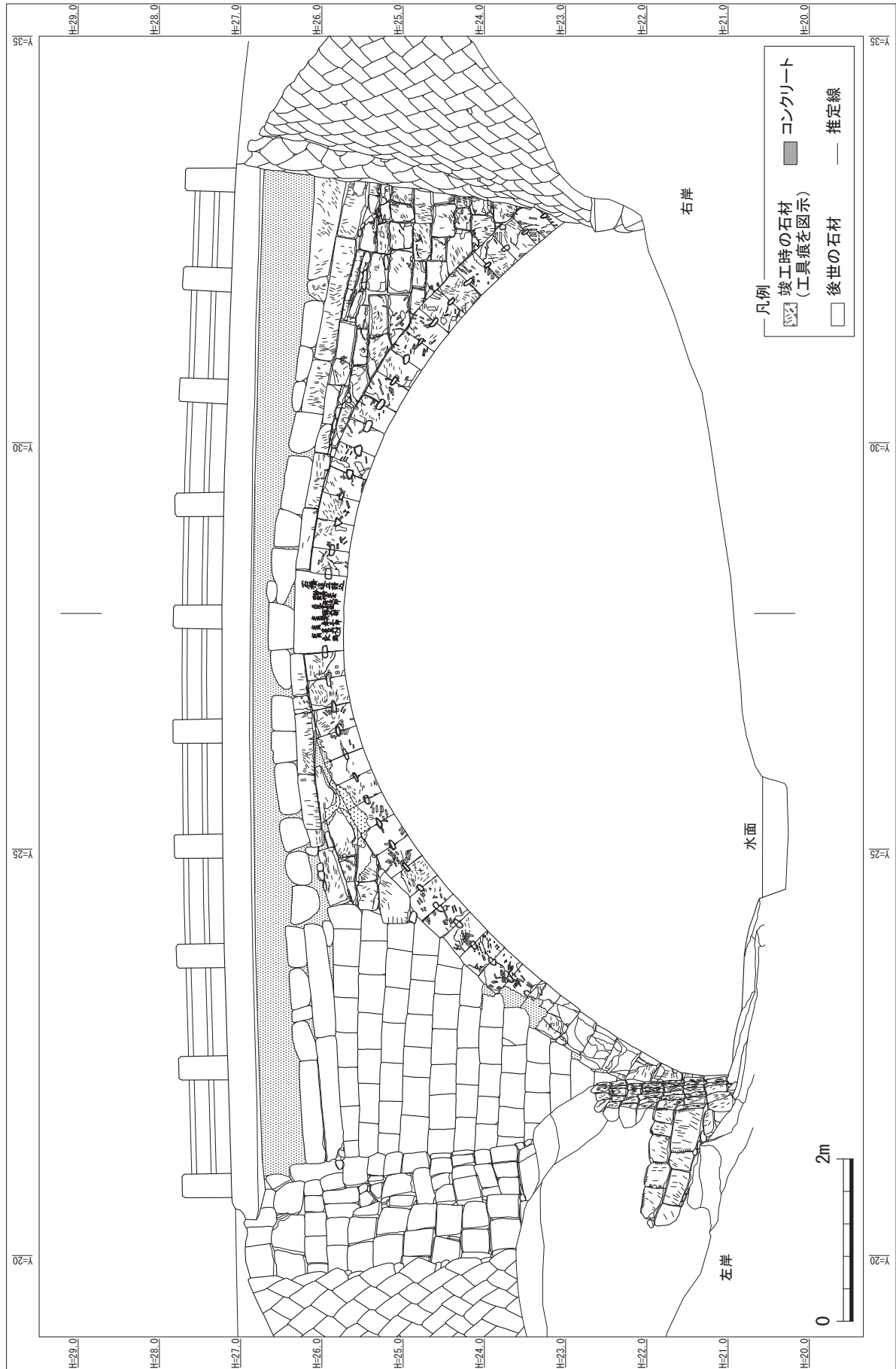
豊岡の眼鏡橋脇の水田（遊水地）



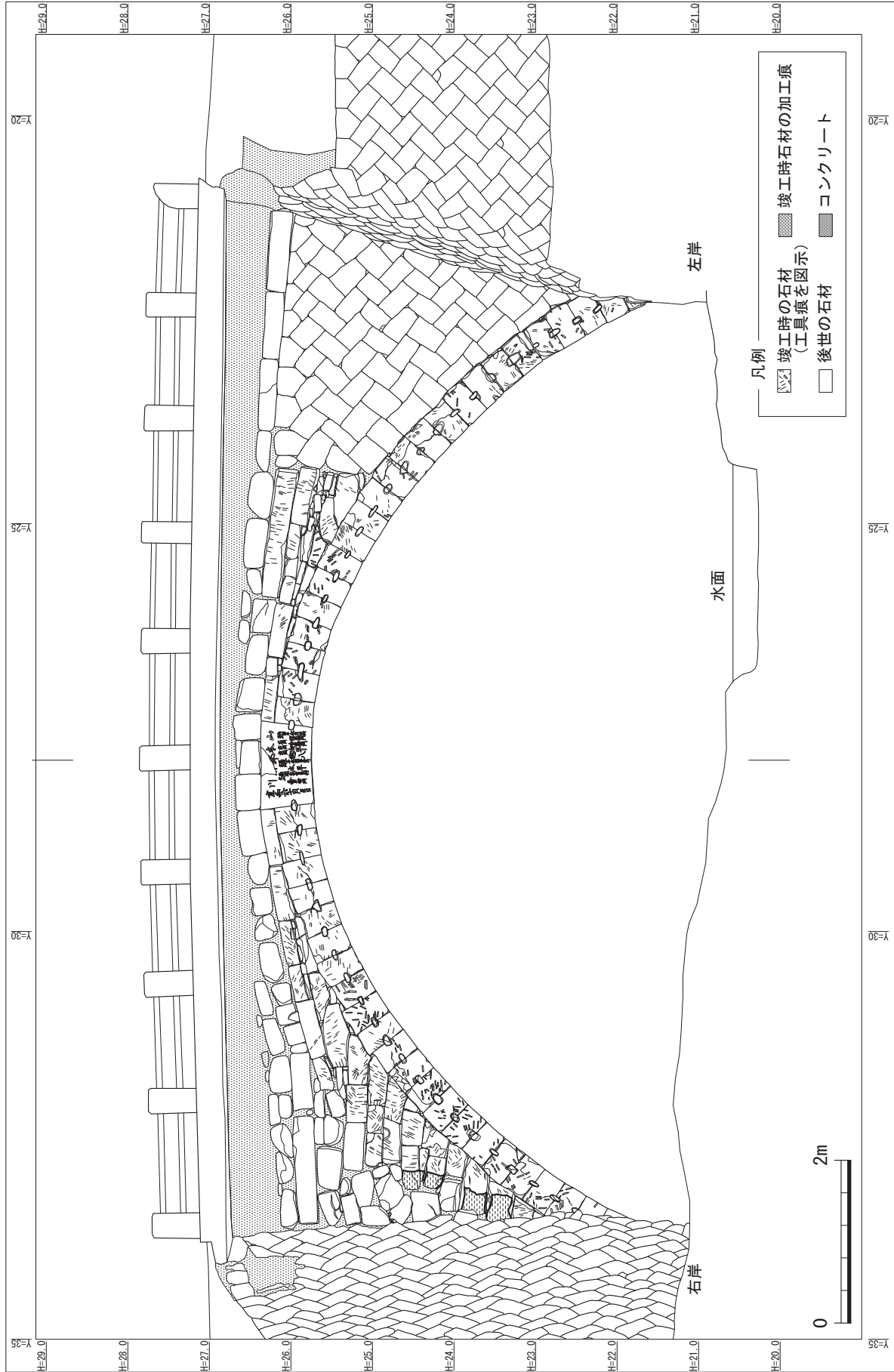
第190図 豊岡の眼鏡橋 全体配置図 (1/360)



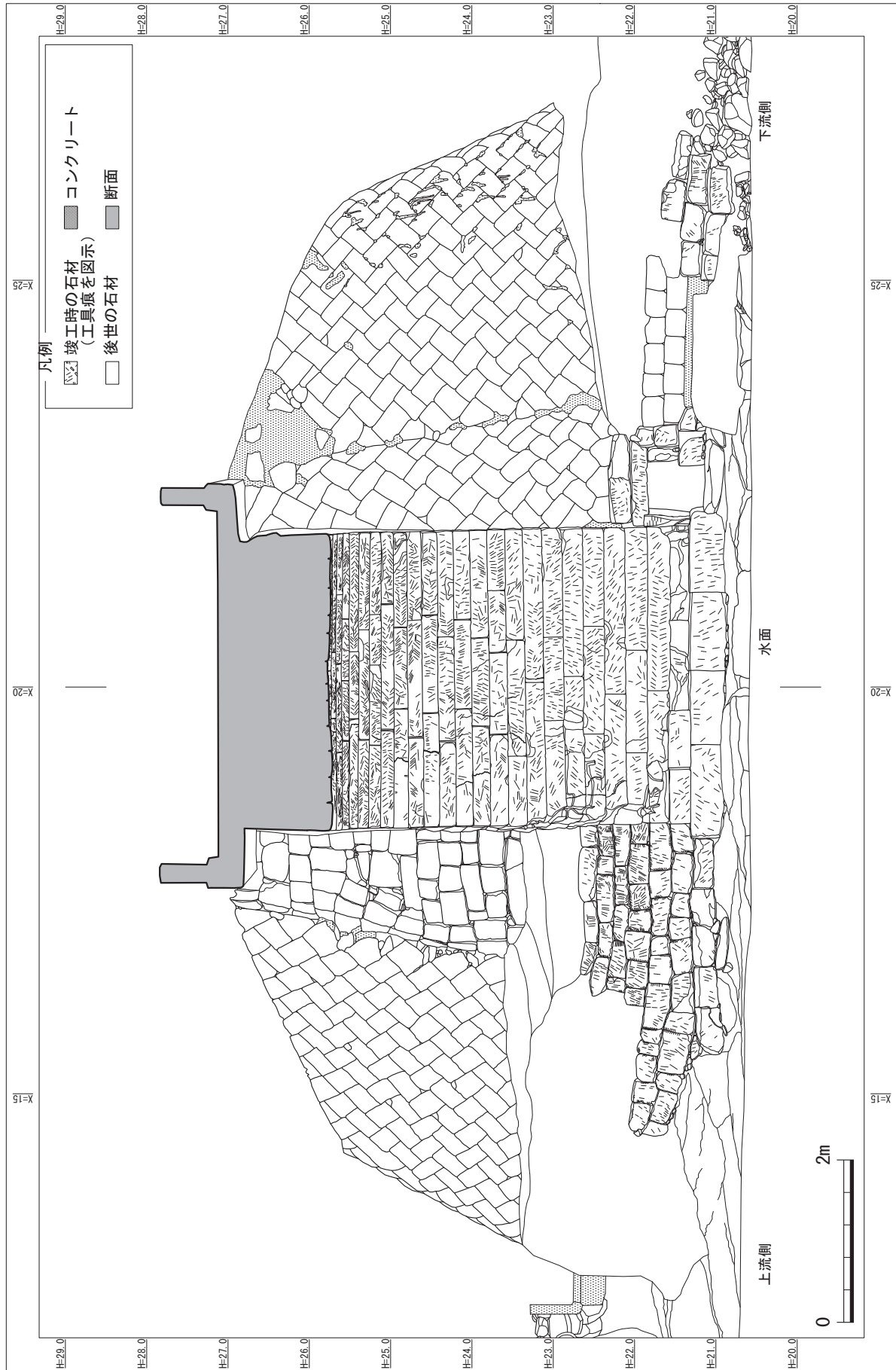
第191図 豊岡の眼鏡橋 平面図 (1/70)



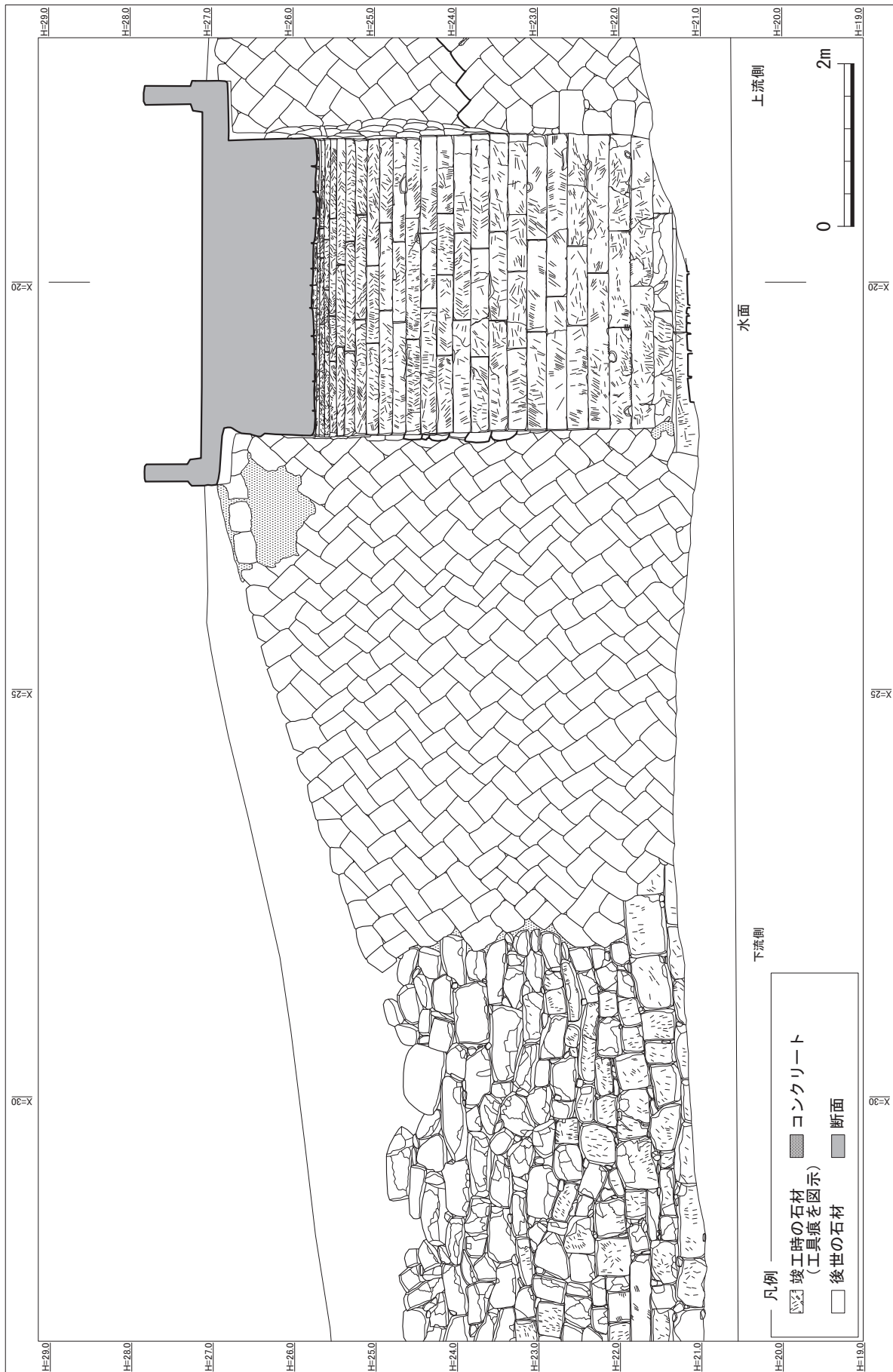
第192図 豊岡の眼鏡橋 立面図 (上流側) (1/70)



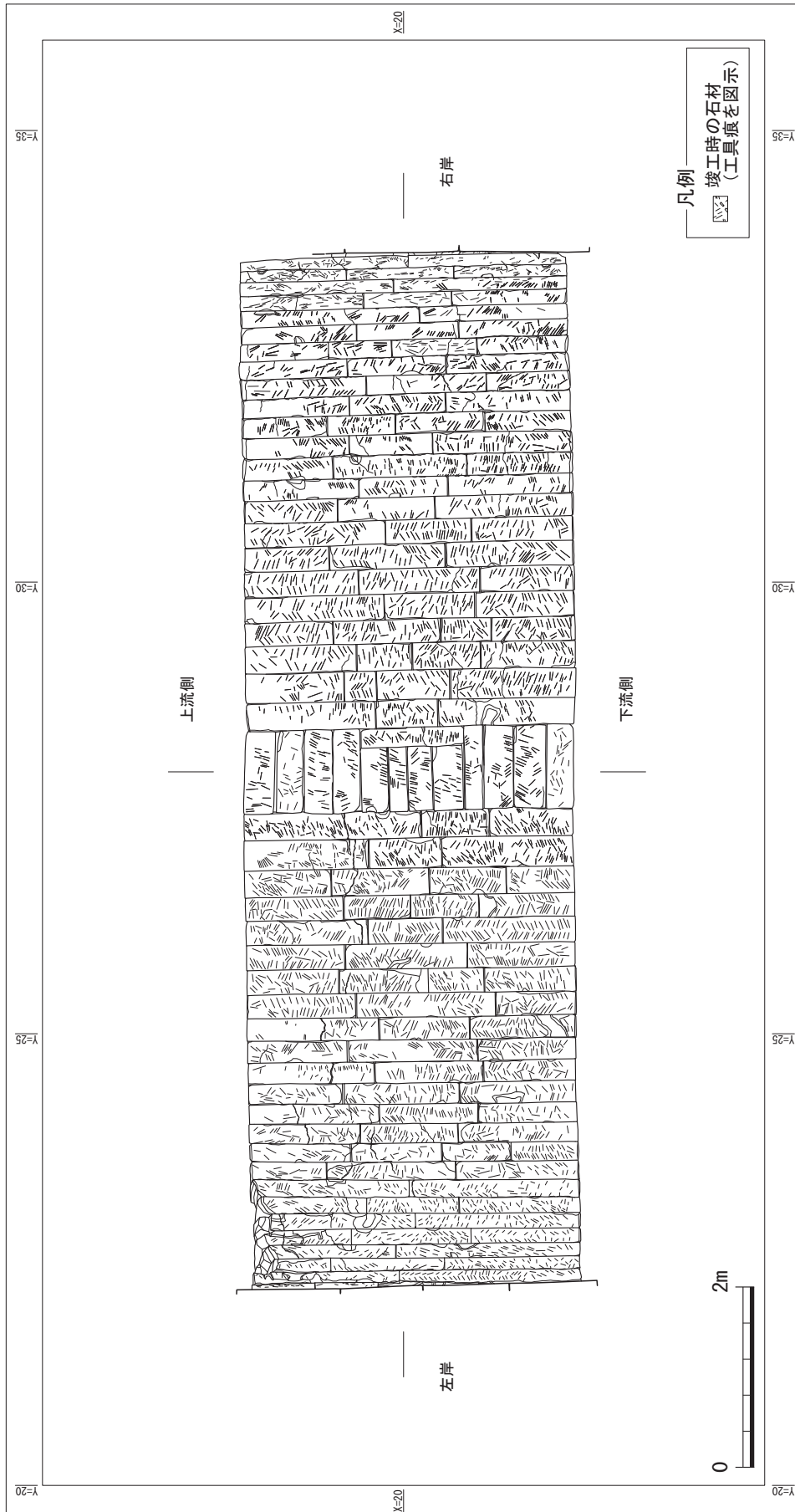
第193図 豊岡の眼鏡橋 立面図（下流側）（1/70）



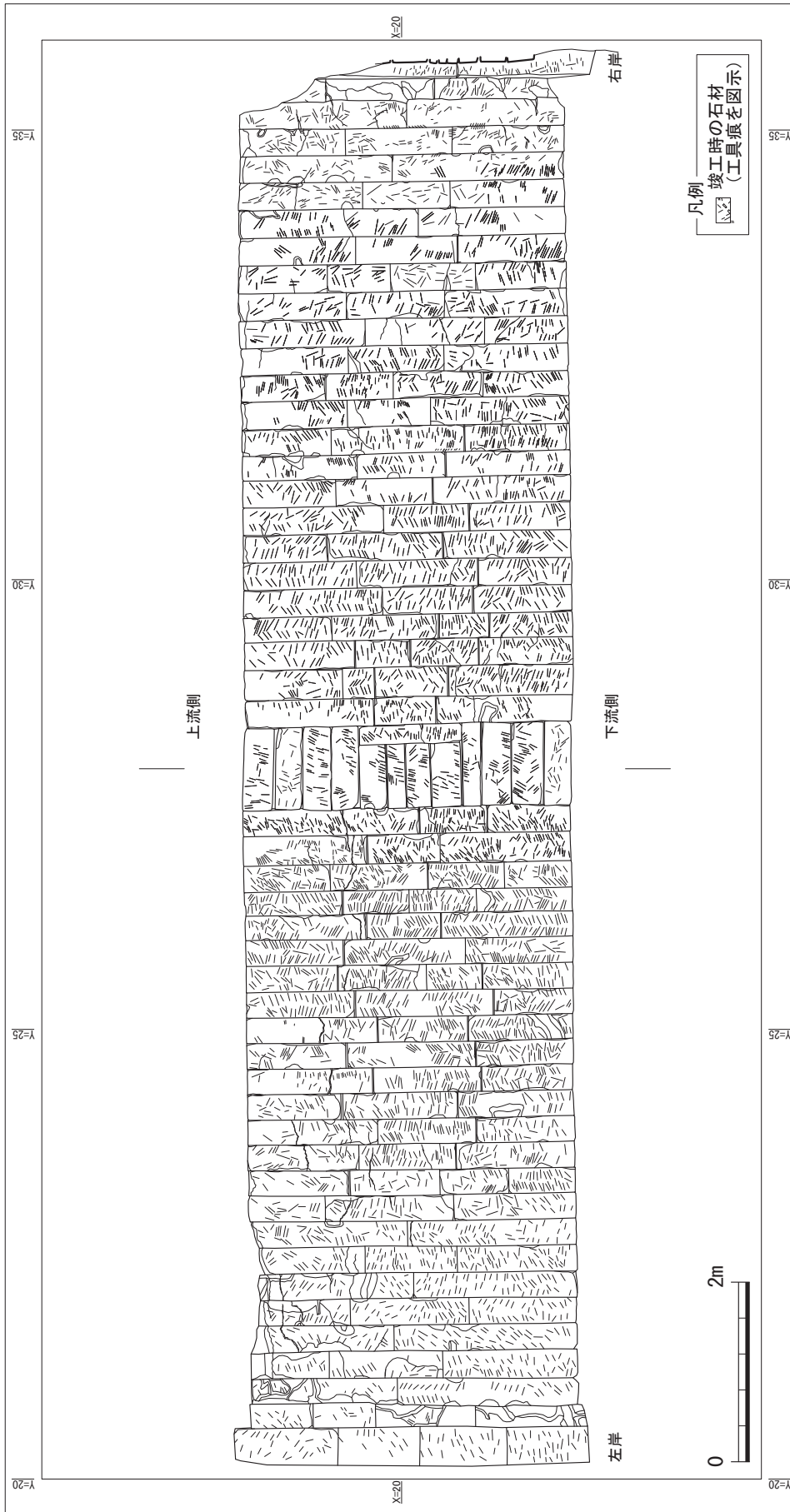
第194図 豊岡の眼鏡橋 左岸取付面立面図 (1/70)



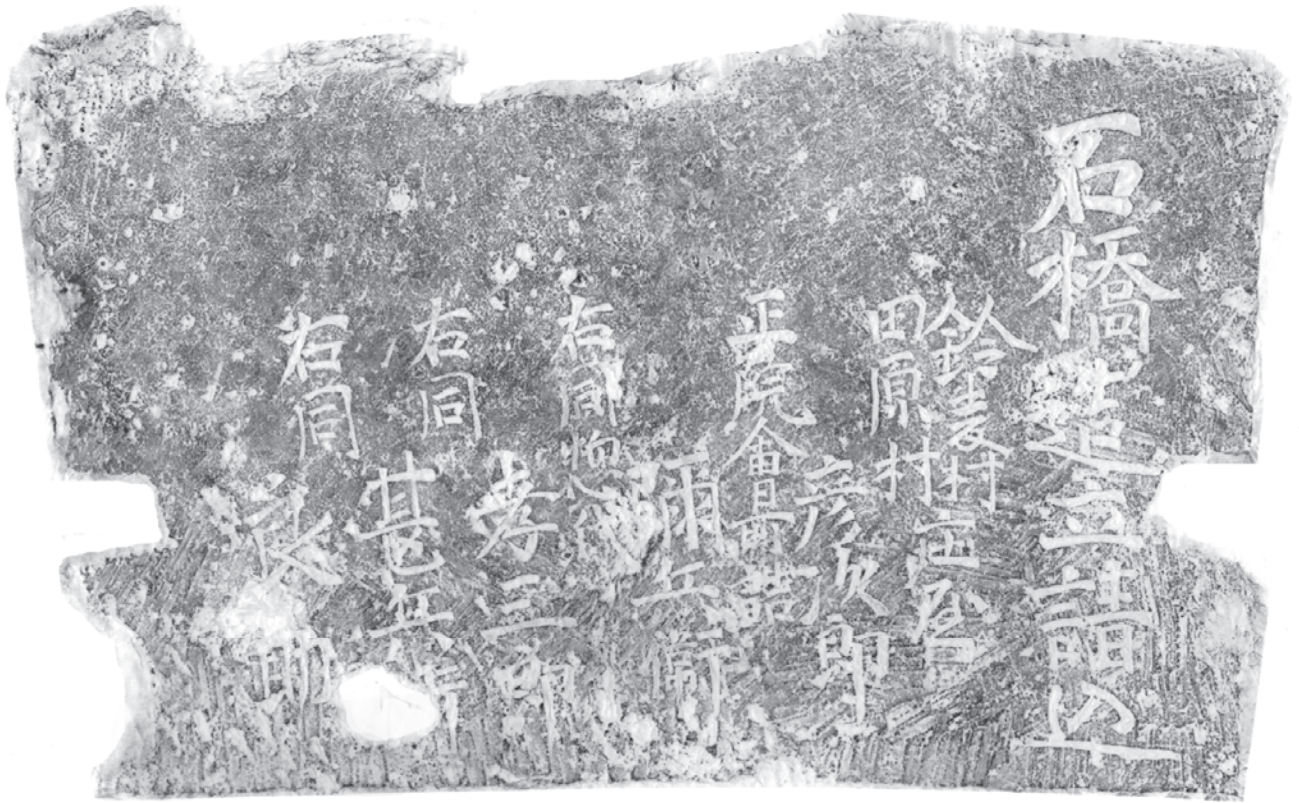
第195図 豊岡の眼鏡橋 右岸取付立面図 (1/70)



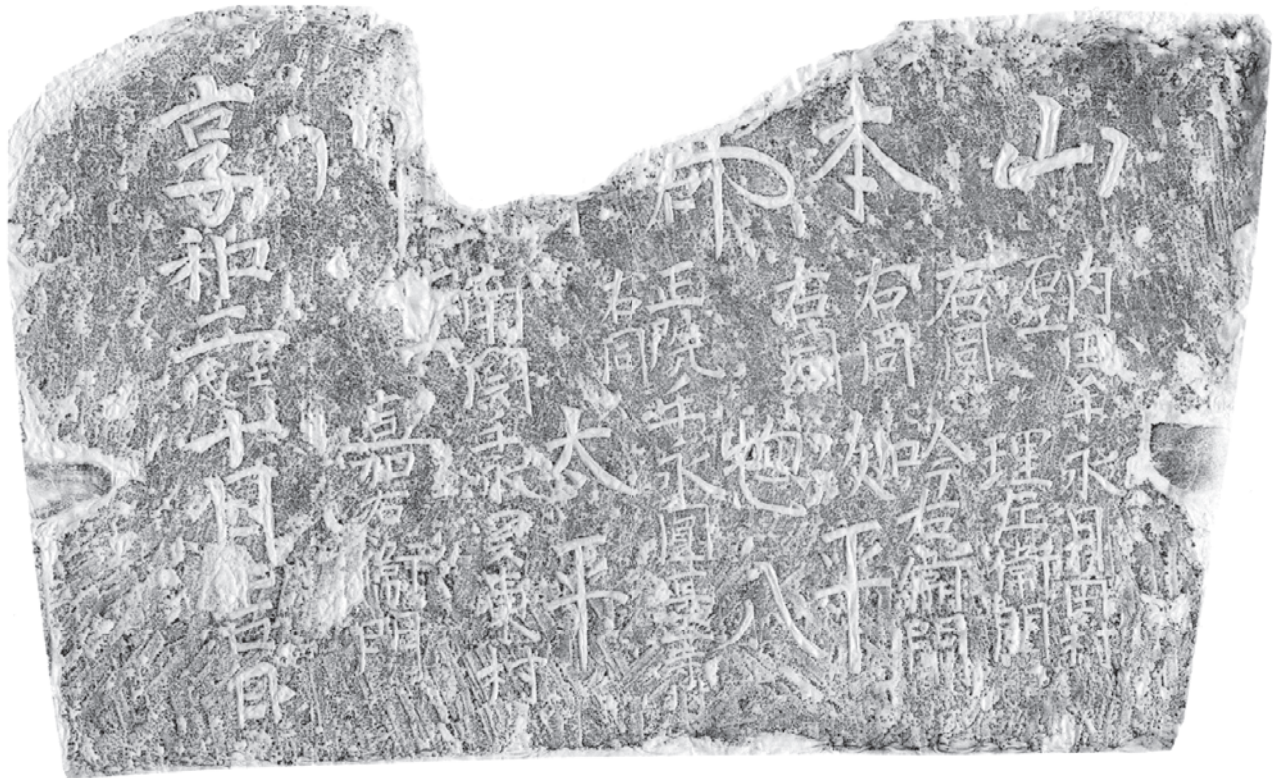
第196図 豊岡の眼鏡橋 下面見上図 (1/70)



第197図 豊岡の眼鏡橋 下面展開図 (1/70)



上流側拓影



下流側拓影



第 198 図 豊岡の眼鏡橋 要石拓影 (1/6)



豊岡の眼鏡橋（上流側右岸から）



豊岡の眼鏡橋（下流側右岸から）



上流側左岸上部の旧材



上流側右岸壁石の旧材



上流側左岸輪石の太柄



上流側右岸輪石の太柄



下流側右岸上部の旧材



下流側左岸上部の旧材



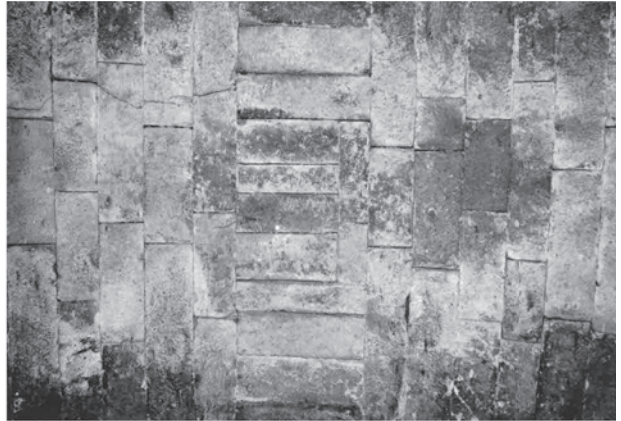
下流側右岸壁石下部の削痕



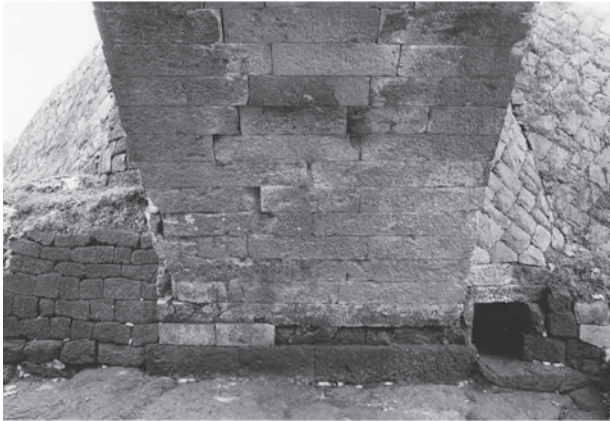
下流側左岸輪石の太柄と太柄穴



上流側左岸輪石下部の破損



輪石天井の要石



左岸輪石、亀裂などが目立つ



右岸輪石、破損などは少ない



上流側左岸の護岸



右岸輪石の工具痕



下流側左岸下部端の排水溝開口部



右岸基礎の敷石